

素問・王冰序を読む

平成二十九年九月二十四日 青鳳会

講師 吉野 久

便宜上、序文を三部に分けた。このうち第二部に、王冰が行なった編纂上の具体的な事例が書かれているが、これについては段を改めて述べる。

また、素問の各篇には篇数をあらわすアラビア数字を附した。王冰や森立之などの文中にも、同様に附した。

テキストには日本内経医学会版「素問」(原版は四部叢刊に所蔵)を用いたが、PDFに変換した際、文字が正確に現れないものは、適宜現代日本の字体に直した文字がある。

講義上、原文の読み下しは●(青緑)を以って記し、注記は●(緑)、講義者の見解は●(茶)で記した。

重廣補註黄帝内經素問序

啓玄子王冰撰 新校正云按唐人物志冰仕唐爲太僕令年八十餘以壽終

夫れ縛を釋き、艱を脱し、真を全うし、氣を導き、黎元(れいげん) || 黎彦(れいげん)を仁壽(にじゆう)仁者

寿(じゆう)じんしゃ(じんしゃ)ハいの(ハいの)ちな(ちな)が(が)シ(シ) 論語(ろんご)・雍正(おんせい)に(に)拯(すく)い(る)い、羸(れい)劣(りやく)を(を)濟(すく)いて(いて)以(も)て(て)安(やす)きを(を)獲(と)る(る)者(者)

は、三聖の道に非ざれば、則ちこれを致すこと能わず。孔安國、尚書に序して曰く、伏羲、神農、黄帝の書はこれを三墳（きらめく）1と謂う。言は大道なり、と。班固、漢書藝文志に曰く、黄帝内經十八卷、素問は即ち其の經の九卷なり、靈樞九卷を兼ねて、すなわ 迺ちその數なり、と。

復た年移り、代革あらたまると雖も、而も授學は猶お存す。其人に非ざるを懼れて、

而して時に隱す所有り（非其人勿教、非其真勿授素問・金匱真言論）。故に第七の一

卷は師氏これを藏し、今の奉行するは惟だ八卷爾。ほうこうのみ 然り而して其の文は簡、

其の意は博ひろ（博く、其の理は奥くらくみ、其の趣は深し。天地の象は分れ、陰陽の候を列し、變化の由は表われ、死生の兆は彰らかなり。謀らずして遐とと（カ）遠

い迺ジ（ジ）近いは自ら同じく（莊子の思想）2、約むることなくして幽明は斯く契

る（意気投合する）。其の言を稽と3えば（しるし） 4有り。これを事に驗せば紛わず、誠

に至道の宗おおもと、生を奉ずるの始と謂うべし。

假ひ天機は迅發なれども、妙識は玄通するが若く、（蔵の臣を貝におきかえた 字テンととのえる、なしとげる（謀）はかりごと、計画。掏謀↓そなわった学問（生 まれながらの智慧（ただ））に雖（唯）に屬すといえども、標格（たかい品格）。この場合は懸命

な研究の成果は亦た詰訓に資するが若し。未だ嘗て行くに逕みちに由らず、出ずる

に戸に由らざる者有らざるなり。然り、意を刻み、精を研ぎ、微を探り、隠れたるを索め、或は真要を識契するとき、則ち牛を目するに全きなし(莊子・養生主)「三年之後、未嘗見全牛」三年立った今では、牛を捌く時に牛の全部を見ることはなくなった。故に動ずれば(努力すれば)則ち成ること有り、猶お鬼神の幽かに賛し(たすける)、而して命世(命ⅡなづけるⅡ名前、名が世に出たもの)奇傑の時時に滝出するがごとし。則ち周に秦公(秦越人扁鵲)有り、漢に淳于公(倉公淳于意)有り、魏に張公(張機)、張仲景(華佗)有り、皆、斯の妙道を得たる者なり。咸日に

みな

其の用を新たにし、大いに蒸(たぐ)さん(の)人を濟う。華葉(花と葉)は^{たが}遞いに榮え、

聲(名声)實相い副う。蓋し教えの著しきなり、亦た天の假なり。

1 賁 解 ヒ・フン・ホン かざる・おおきい・うつくしい・やぶれる

華

ヒは華の象形で内にある力が外に現れる意がある。これに貝をくわえて

飾ったものが賁。

2 近くであれば物は大きく見え、遠くであれば小さく見えるが、本体は同一の物であり、隔たる距離は問題ではない。

3 稽…かんがえる 稽其類(易・擊辞下)

とう、たずねる 稽於聖人(莊子・天運)

4 テキスト(日本内経医学会版・元版は四部叢刊版)にある「徴」は欠筆か。北宋の仁宗の諱は徴で、この本の製作当時、仁宗崩御のことがあれば、欠筆たりうる。

二

冰、弱齡(二十日弱)。礼記・曲令、昔在黄帝、生而神靈、弱而能言素・上古天真論より道を慕い、夙に養生を好む。幸いに真經に遭い、式つて龜鏡つと ようせい || 龜鑑、龜卜と鑑で、どちらも人の手本や判断材料と爲す。而るに a 卅本は紕繆し編目は重畳す。

b 前後は倫せず、文義は懸隔す。c 施行(医学として実行する)は易からず、披本もを開く會(會得)も亦た難し。d 歲月既に淹り(時間がつたつ、いたる)襲うて、以て

弊を成す。e 或は一篇、重出し而も別に二名を立つ。f 或いは兩論併吞する

に都て一目と爲す。g 或いは問答未だ已らざるに、別に篇題を樹つ。h 或

いは脱簡を書かずして卅に闕という。①合經を重ねて鍼服を冠し、②方宜を

併せて■(ガイ 亥十欠) 篇と爲す。③虚實を隔たるに(虚実と無関係なのに)逆從

と爲す。④經絡を合せて論要と爲し、⑤皮部を節して經絡と爲す。⑥至教を

退けて、以て鍼を先にす。諸の此の如き流れは勝げて數うべからず。且つ、

將に岱嶽(泰山)に升らんとするに、逕に非ざれば奚いずいより爲す。扶桑(東海中の

神木に詣でんと欲せば、舟無くして適くこと莫し。乃ち精しく勤め、博く訪ねて、而も忸びに其の人(同学の士)有り。十二年を歴て、方に理要に臻る。詢いたねて、

問うて得失を謀るに、深く夙心(常日頃からの気持ち)に逐う。

時に先生、郭子の齋堂に於いて先師張公の秘本を受得す。文字は昭晰にして義理は環周す。一たび以て參詳すれば、群疑も氷釋す。末學に散じ、彼の師資を絶やさんことを恐る。因つて撰註して用いて不朽に傳う。(運氣7編、19, 20, 21, 22卷のこと)

舊藏の卷を兼ねて、合して八十一篇、二十四卷、勒して(彫つて)一部と成す。(刺法論72、本病論73は亡)冀くば尾を究め、首を明らかにし、註を尋ね經を會し、童蒙を開發し、至理を宣揚して已まん。

⑦其の中の簡脱し、文斷ち、義の相い接せざるは、經論を搜し求め、遷移して以て其の處を補う所有り。⑧編目の墜缺して指事の明らかならざる者は、其の意趣を量り、字を加えて以て其の義を昭らかにす。⑨篇論吞併し、義の相い涉らず、名目を闕漏する者は、事類を區分し、目を別して以て篇首に冠す。⑩君臣の請問の禮儀を乖失する者は、尊卑を考校し、増益して以て其の

意を光らかにす。あき⑪錯簡碎文し、前後重疊する者は、其の指趣を詳らかにし、

繁雜を削去し、以て其の要を存す。⑫辭理秘密にして粗^ほ論述し難き者は、別して玄珠(仏教や道教では道の本体とされる言葉。ここでは王冰の著した書名)を撰し、以て其の道を陳ぶ。⑬凡そ加うる所の字は、其の文を皆朱書す。今、古をして必ず分ち、字をして雜糅ならざらしむ。

三

ねがわ

庶くは厥の聖旨を昭彰し、玄言を敷暢し、列宿(星座)は王く懸るが如く、碣張(いずれも星座の名)は亂れず、深泉は浄■(エイさんずい+栄 濁りなく澄む)にして

みな

鱗介は咸分れんことを。君臣に天枉の期なく、夷夏は延齡の望有らんことを。

工徒をして誤り勿から俾^しめ、學は惟だ明らかに、至道は流行せしめ、徵音(五

音の一つで、二番目に高い音)は累屬し、千載の後、方に大聖の慈恵の無窮を知ら

しめん。時に大唐寶應元年(西曆762年)。歲、壬寅に次るに序す。^{いた}

將仕郎守殿中丞孫 兆 重改誤

朝奉郎守國博士同校正醫書上騎都尉賜緋魚袋高 保衡

朝奉郎守尚書屯田郎中同校正醫書騎都尉賜緋魚袋孫 奇

朝散大夫守光祿叻直秘閣判登聞檢院上護軍林 億

冒頭で述べたように、この第二部に王冰の行なった編纂の具体的な事例が述べられている。ここでは、それを具体的に見てゆくことにする。

二

㊦合經を重ねて鍼服を冠し
顧觀光(1799～1862)の『素問校勘記』に以下のようにある。

離合真邪論 27 注に「新校正に云う、全元起本を按ずるに第一卷に在り、名づけて經合。第二卷に重出し、名づけて真邪論」とある。これに言うように、八正神明論 26 と離合真邪論 27 の内容はほぼ同じで、また、26 冒頭に「黄帝問うて曰く、用鍼の服には必ず法有り」とある。王冰のいう「合經(經合)を重ねて鍼服を冠し」とは、このことであろう。

このままでは分りにくいですが、表にすると分りやすいと思われる。

	全元起本		現素問
第一卷	合經(王冰) 經合(新校正)	← 重出	離合真邪論 27
第二卷	真邪論	← 重出	八正真明論 26 (冒頭に「用鍼之」とあり、 これが王冰のいう鍼服で はないか)

② 方宜を併せて■(ガイ 亥十欠)篇と爲す

森立之「案ずるに異法方宜論12は舊くは糝論38の末に併合されるか」

新校正注では、両者とも「全元起本第九卷に在り」とする。

森立之 蔓延元年(1860年)の識語

「案ずるに西洋の學は清朝に盛行して皇國に延及す。近來の醫家は其の術を修める者、尤も衆し。蓋し異法方宜の義を辨ぜざるの甚だしき者なり。其れ本邦、また南海、北海に在りては、地勢は同じならず。故に同病なれども治は異なれり。是れ其の然らざるを得ずして然りとする者なり。今西洋者流は、

新奇を漫衍し、人目を眩惑し、其の異域の方法を以って本邦に施す。固より
方宜の所為を知らず。何ぞ巧拙を以ってこれを論説せしむに足らんか。但し
これ※右携左策（手を取り合って、協力して 〓左提右掣（さていゆうけつ、左拈蠖（さたんえい、虫へん＋
原、蠖とともにイモリのこと。左手にイモリをつまんで、極口擧效（言葉を尽
くして効能を挙げる）、売薬して産を爲すの徒、而して吮（しゅん）ゆっくり吸い取る吸
う↓急激に吸う（ようはそ）靡破疽（術、或はこれ施用すべし、また別科にあるに當りては、
決して醫流十三科と列せしむるの比にはあらず」

※この部分は、立之の馱洒落

㊦ 虚實を隔たるに逆従と爲す

劉衡如（人民共和国）

四時刺逆從論 64 の「厥陰有余から筋急の目痛に至るは、全元起本第六卷に
在り」「春氣経脈に在りから篇末は、全元起本第一卷に在り」右が逆従を論じ
た部分で、「三陰三陽有余は実と為し、不足は虚と為す」以下は虚実を論じた
部分だが、同一の論篇に入れられている。

㊧ 経絡を合せて論要と爲し

伊澤柏軒は「絡は恐らくは終の誤りならん」と論じ、ここで王冰のいう「経
絡」は「経終」のことだろうとしている。

森立之は柏軒の論を継いで、「蓋し玉版論要 15 と診要経終 16 とは、舊くは合
併して一編と爲すか」と論じている。

太素では色脈診・篇末に「診要畢わんぬ」とあり、つづく診要經終の篇首には「黄帝問うて曰く、診要は如何」とあるので、現行の「玉版論要」は「玉版診要」が正しいであろう。

㊦ 皮部を節して經絡と爲す

全元起本では皮部論56の一部として經絡論57を含めていたが、王冰はこれを二つに分けた。

㊧ 至教を退けて、以て鍼を先にす

王冰は、高い教えであっても後回しにして、鍼の用い方を巻頭に置いた、としている。しかし素問ではこの通りになっているだろうか。実際にこのような構成になっているのは、九鍼十二原篇を冒頭に置いた靈樞である。

森立之は以下のように論じている。「案ずるに、開卷第一には治病の至教を退け、而して鍼法の末技を先にす、の謂いか。元起本に平人氣象論(脈の診方を論ずる)は第一巻に在り、上古天真論(素問よりさらに古い上古代を論ずる)は第九巻に在り」

その他の編纂については、以下に簡潔に述べる。

⑦ 脱簡して文が途切れたり、前後の意味が通じない所は、他の經や論を探して、移したり補った。

⑧ 篇目がなくなったり、何を指しているか分らないものは、字を加えて、その意味を明らかにした。

⑨篇と論が一緒になってしまい、意味が通じなくなっている所、名目がなくなっている部分は、内容を区分し直して、更めて題目をつけて篇首に冠した。

⑩君臣の礼儀が失われている部分は、読み直して君臣の間をはっきりさせ、文義が明らかになるようにした。

⑪錯簡や、簡柵が折れたり、文の意味が重なったりしている部分は、その趣旨を明らかにするために、煩わしい部分を削り去って、要点をはっきりさせた。

⑫言葉の意味が秘密になっていて、論述しがたい部分は、べつに『玄珠』という本を著して述べた。※

⑬加えた所の字は、すべて朱書して、新しい文字と古い文字が区別できるようにしてある。

※新校正云う、王氏の玄珠を詳らかにするに世には傳わらず。今、玄珠十卷、

照明隱旨三卷有るは、蓋し後人の附託の文ならん。王氏の書にあらざると

雖も、素問第十九卷より第二十二卷まで、四卷に於いては頗る發名有り。

それ隱旨三卷と、今世に謂う天元玉冊とは、正に相い表裏をなせども、王冰の義とは多く同じならず。

【参考】

島田隆司「素問講義」